INTERVIEW

鳥羽市立神島診療所 所長
小泉圭吾先生

地域に育てられて

聞き手：山田隆司　地域医療研究所長

地域を離れて実感した地域の楽しさ

山田隆司（聞き手）　今回は，厳しい地域で今頑張っている先生にハイライトを当てようということで，三重県の鳥羽市立神島診療所に小泉圭吾先生を訪ねました．

まずは先生が神島診療所の所長として赴任するに至るまでの経緯を少しお話しいただけますか．

小泉圭吾　私は高校生のころは宇宙飛行士になりたかったのですね．ところが裸眼で視力がないとだめだというのを何かで読んで，夢破れ……ちょうどそんな時に祖父が交通事故で亡くなって，そのときに対応された医師の姿が格好よかったので，医師になろうと思い医学部を目指して勉強を始めました．一浪中に，偶然自治医科大学の赤本を見つけて「お金がかからないこういう大学があるのか」と知り，母子家庭であまり裕福でなかったのでもうここしかないと思いました．なので，地域医療をやりたいといったことは全く考えてなかったのですね．

山田　とにかく卒業できて，医者になれればということだったのですね．

小泉　はい．だから，今，地域医療や総合診療をやりたいと言って見学や実習に来てくれる学生さんたちを見ると「すごいなぁ」と思って感心してしまいます．

山田　先生は三重県の出身ですよね．卒業後はどこで研修したのですか．

小泉　初期研修は四日市の県立総合医療センターでローテート研修をしました．３年目で地域に出て，町立南伊勢病院という，急性期30床で療養

型40床の病院に赴任しました．でも地域医療に対してネガティブなイメージがずっとありましたので，早く９年間の義務年限を終えたいということばかり考えていました．

その病院は私も含めて医師が４人だったのですが，私が３年目の１月に院長と副院長が退職してしまい，自治医大の先輩も４年目が終わるところで早く引っ越してしまって，３月には私１人になってしまったのですね．病棟も救急もあるし，全然寝られないし，あまりの忙しさと納得のいかない環境に気持ちが駄目になってしまったということがありました．４年目になって，先輩の先生１人と後輩１人が来てくれたので，３人でなんとかまわせるようになりましたが．でも「もうへき地はいやだ」と思っていましたし，感染症科の医師になりたかったので，後期研修で自治医大の地域医療学教室に入りながら感染症科で勉強させてもらいました．

山田　それが５年目ですか？

小泉　５年目です．大学病院の感染症科の研修はすごく楽しくて，最初のころは「やはり感染症科の医者になりたい」と思っていたのですが，だんだん南伊勢のことが懐かしくなってきて…….感染症科医を目指す医師がたくさんいるのを見て「自分が絶対ならなければいけないのか？」とも思いましたし，自治医大の卒業生としてもっとやらなければいけないことがあるのではないか，求められているところでやるべきなのではないか，という考えが心に浮かんできたのです．あんなにへき地を嫌っていたのに，自分でも思いがけない感情でした．嫌だと思いながらも地域でやっていたことが僕の心を惹きつけていたようでした．

鳥羽市立神島診療所

山田　当時は無我夢中で考える余裕もなかったわけですからね．

小泉　はい．地域の人たちと深く関わって，地域の中に入って仕事をすることがとても楽しかったということにへき地から離れてみてようやく気付いて，これからはへき地で働こう！と決めたのです．それで６年目にリベンジしようと思ってまた南伊勢に戻りました．６年目に行ったらやっぱり楽しかったんですね．そんなころ奥野正孝先生が神島から出られることになって…….

山田　奥野先生は神島から一度大学へ戻られて，また神島へ赴任しましたが，そのころもう長かったですよね？

小泉　11年間いらっしゃいました．

12月の県人会で先輩たちに「奥野先生が神島から出るので，もうおまえしかいない」と言われて（笑），奥野先生がどういう離島医療，へき地医療をされていたのかとても興味があったし，そう言われては行くしかないなと思って承諾して，７年目から行くことになりました．

山田　奥野先生と交代のような形で先生が着任したわけですね．